

県立都市公園におけるインクルーシブな 遊び場の整備・運営に関する研究

研究調査中間報告書

2024 年 3 月



(公財) ひょうご震災記念 21 世紀研究機構
研究戦略センター研究調査部

令和5年度 県立都市公園におけるインクルーシブな遊び場の整備・運営に関する研究

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科 嶽山 洋志

1 研究の背景・目的

県立都市公園では、障がいのある子どもや外国籍の子どもなど、多様なバックグラウンドを持つ子どもたちが楽しめるアクセシブルでインクルーシブ（包括的）な遊び場づくりが課題となっている。そのような社会的課題に対し、本課では令和5年度より本格的にインクルーシブな遊び場づくりに取り組みはじめ、9月末日には明石公園にインクルーシブ遊具を設置したところである。具体的には、車椅子のまま上まで上がれる複合遊具や、肢体不自由な子を寝かせて遊べる振動遊具、自閉症の子どもが隠れることが可能なドーム型遊具などを整備した。ただ、身体的な障がいのある子どもたちに対する環境づくりは充実しているが、発達障がいのある子どもたちなど、多様な特性に対応しうる環境となっているかと問われると、必ずしもそうとはいえない。例えば、東京都建設局の「だれもが遊べる児童遊具広場」整備のガイドラインで想定されている対象者は12の特性に整理されていて、より多様な特性に対応しうる環境の議論が必要であるといえる。また、対応のあり方についても遊具中心の施設整備が大半で、自然環境のあり方についてはほとんど言及されていない。

さらに令和4年度に川尻らが行った、自閉症スペクトラム障がいのある子どもとその親が公園で出会うトラブルや困難について、児童発達支援センターの職員らを対象に行ったアンケート結果をみると、対人面でのトラブルや障がい理解に関する課題が確認でき、障がい理解のある公園コミュニティをいかに創出していくかも課題であるといえる。

以上のような2つの課題に対し、我々はその解決方策としてプレーパークに着目した。プレーパークは手づくりの遊び場で、手づくりであるがゆえに、環境を子どもたちの思いや特性に合わせて変化させることができる。具体的に、淡路島冒険の森ではブランコをしたいと言う車椅子の子どものために、車椅子にロープを結び、それを樹木の枝にひっかけて体験できるようにしたり、小さい子どもには足場の間隔が狭いはしごをつくり、大きい子どもには間隔が広いはしごを作って提供していたりしている。他にも、相模原の銀河の森プレーパークでは不登校の子どもたちの居場所となっている例もあり、このような対応が可能な理由は、プレーリーダーと呼ばれる大人が運営に関わっていることが大きい。

以上のような背景から、本研究では都市公園におけるインクルーシブな遊び場づくりの実現に向けて、1) 全国の自治体を対象にアンケートを実施、インクルーシブな遊び場づくりの実態を把握するとともに、2) いくつかの県立公園にて公園の実情に合わせたプレーパークやその評価活動を実施する。上記をモデルケースとして、3) 遊び場の実施体制や場の整備、多様な主体の連携促進方策、プレーリーダーなどの専門職の人材育成や配置などの方策を定めたモデルプログラムを策定することを目的とする。これにより、今後、他の県立公園において市民団体等多様な主体と連携しプレーパークの実施の横展開を図ることとする。なお、本年度は1) 2) に取り組んだので、その結果を報告する。

2 調査方法

本年度は、全国のインクルーシブな都市公園の実態を、アンケートを通じて把握するとともに、明石公園と赤穂海浜公園を対象に、社会実験としてのインクルーシブ・プレーパークを実践、明石公園では自閉症スペクトラム障がいのある子どもたち（ASD 児とする）を対象としたプレーパークに、赤穂海浜公園では不登校の子どもたち（正確には不登校であった子どもたち）と作るプレーパークに取り組んだ。

まずアンケートは、全国の都道府県および市町村の公園に関わる 1,618 部局に送付、852 件から回答があり、そのうち有効回答数は 827 件であった（有効回答率：51,1%）。調査期間は 2024 年 3 月 1 日から 31 日とし、内容は「インクルーシブな公園づくりに取り組んでいる内容」「さまざまな特性のある子どもたちへの対応状況」「障がいのある子どもやその家族が抱える困難について（その中でも特に ASD 児に対する対応について）」「プレーパークの取り組み実態について」の 4 項目とした。解析では、単純集計に加えて、既往研究「川尻優・嶽山洋志（2022）自閉症スペクトラム障がいのある子どもとその親が公園で出会うトラブルや困難について」の結果と比較しながら考察を進めた。

次にプレーパークの開催日は表-1 に示すとおりで、全部で 9 回実施した。内容は朽ち木の中の虫探し、ロープ遊具、クラフト、昆虫採集、落ち葉のプール（明石のみ）、焚火（赤穂のみ）、化石の発掘体験（赤穂のみ）などである。調査は、前者の明石公園では、11 月 2 日に福祉型児童発達支援センター「A 園」の親子遠足に合わせて実施、保護者に対して ASD 児が好む遊び場に関するアンケートを実施した。内容は「子どもたちと相性の良い遊び場や遊び素材」についてで、23 組から回答を得た。同様に 2 月 10 日の明石公園でも、参加した一般来園者 22 名を対象に同様の調査を実施、11 月 2 日の結果と比較することで、ASD 児の遊びや遊び場に関する特性を把握した。一方の赤穂海浜公園では、10 月 14 日に社会人スタッフが実践の中で気づいたことの聞き取りを行い、インクルーシブな遊び場としてのプレーパークの妥当性評価を行った。

表-1 プレーパークの開催日

	実施日	実施内容
明石公園	6月24日、7月17日、9月30日、11月2日、12月17日、2月10日	朽ち木の中の虫探し、ロープ遊具、クラフト、昆虫採集、落ち葉のプール（明石のみ）、焚火（赤穂のみ）、化石の発掘体験（赤穂のみ）など
赤穂海浜公園	10月14日、12月2日、1月13日	



明石公園



赤穂海浜公園

3 結果および考察 1

3-1. 自治体アンケートからみたインクルーシブな遊び場の整備実態

図-1 にインクルーシブな遊び場の整備実態を、図-2 にさまざまな特性のある子どもたちへの対応の度合いを示す。図-1 より、まずインクルーシブ遊具の整備実態をみてみると、2024年3月の時点で25.4%と、およそ1/4の自治体で整備されていることがわかった。ただ、24の自治体からは「整備予定」または「検討中」との回答もあり、今後導入がさらに進んでいくものと思われる。

次に、全12項目に目を向けると、最も整備がなされていたのは「園路整備(54.0%)」で、次いで「飛び出し防止の柵や生垣の設置(49.5%)」「障がい児対応のトイレ整備(38.1%)」となった。しかし、それ以降の項目は10%を切っており、ハード整備・ソフト支援ともに、より多様な支援施策が期待される。

図-2 より、さまざまな特性のある子どもたちへの対応の度合いをみてみると、平均である3点より、どちらかという対応できているとされる対象は「乳幼児連れ(2.86)」と「高齢者(2.86)」であり、他の対象者には、どちらかという対応できていないと感じられていることが分かった。また各項目間において差の検定を行い、有意な差が認められない項目ごとにグループ化したところ、④発達や精神的な障がいのある子どもたちや、⑤視覚や聴覚など、肢体以外の身体的な障がいのある子どもたちに対する対応が遅れていることもうかがえた。なお、④外国人への対応がさほどできていないことも明らかとなった。

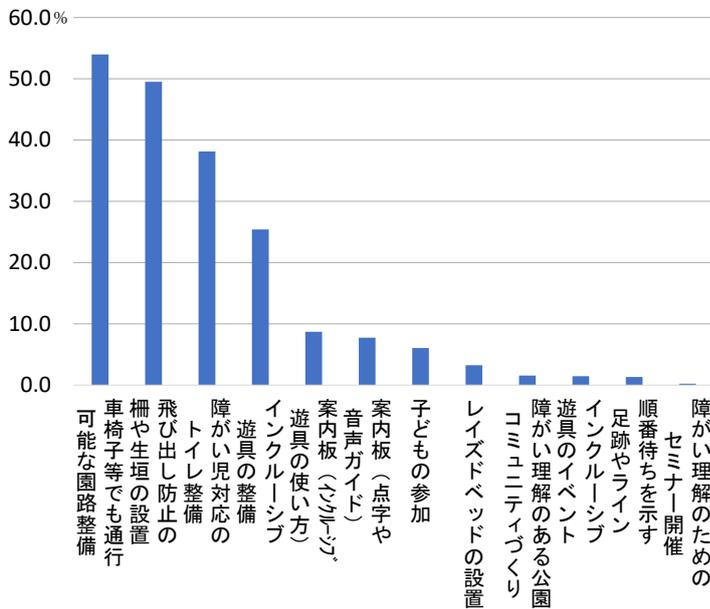


図-1 インクルーシブな遊び場の整備実態 (n=827)

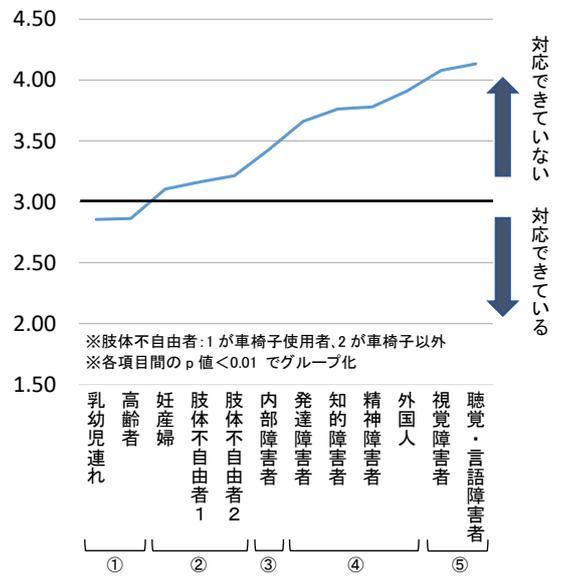


図-2 さまざまな特性のある子どもたちへの対応の度合い (n=820)

3-2. 障がいのある子どもやその家族が抱える困難について (特に ASD 児に着目して)

表-2 は障がいのある子どもやその家族が抱える困難について各主体がどの程度理解して

いるかを示した表である。この表で上段は、児童発達支援センターと児童発達支援事業の職員を対象に、保護者とのやり取りの中で「遊ぶ場所に困るという声はあるか」「帰宅後や休日に公園に行っているという声は多いか」「公園でトラブルや困難な場面にあたったという声はあるか」の3項目について2022年に問うたもので、有効回答数は114件であった。

表-2より、遊ぶ場所に困る場面(82.5%)、公園に行く機会(63.2%)、トラブルや困難に出会う場面(84.2%)の割合を捉えると、いずれも「ある」/「多い」の割合が高くなっていった。特に公園でトラブルや困難な場面に出会う割合は8割以上に上ることが明らかとなった。

一方、今年度の調査で実施した自治体の理解度をみてみると(表-2の下段)、それぞれ15.9%、4.8%、6.5%と極端に低いことがわかった。現場と距離があることから「わからない」という回答も含まれていたが(また本調査はASDに限らず、すべての特性を対象に困りごとを尋ねたが)、公園を統括する行政担当部局に当事者が抱える困りごとがあまり届いていないことから、児童発達支援センターの職員を招いた研修会を開催するなど、何らかの情報を得る仕組みが必要とも考えられる。

表-2 障がいのある子どもやその家族が抱える困難に対する理解

	遊ぶ場所に困る場面	公園に行く機会	トラブル・困難に出会う場面
児童発達支援センター 「ある」「多い」と回答した割合	82.5%(94/114件)	63.2%(72/114件)	84.2%(96/114件)
自治体 「ある」「多い」と回答した割合	15.9%(131/827件)	4.8%(40/827件)	6.5%(54/827件)

表-3に障がいのある子どもやその家族が抱える公園でのトラブルや困難の内容を示す。この表も2022年に実施した川尻らのASD児を対象にしたアンケート結果に、自治体の回答の中でASD児に関連する項目を加筆した表であるが、本表より公園でのトラブルや困難をとらえると、大きく「Ⅰ安全面でのトラブルや困難」「Ⅱ対人面でのトラブルや困難」「Ⅲ障がい理解に関するトラブルや困難」「Ⅳ帰宅時におけるトラブルや困難」「Ⅴその他」にわけることができた。記述数では、Ⅱの①内の「順番が守れない/待てない(47件)」や「他児の玩具を取る(34件)」といったルールに関することや、「他児とのやり取り/交流が苦手(25件)」といった交流に関するもの、Ⅳの①内の「遊びを終われず帰れない(29件)」といった遊びから帰宅への切り替えの難しさに関するものが突出して多かった。そのような場面への対応として、例えば「順番が守れない/待てない」ASD児に対しては、地面に輪を並べる、もしくは描くことで順番待ちが視覚的に理解できるガーデンリングの設置など、国外事例を参考にハードの対策をとることが1つは有効といえる。一方、対人面や障がい理解に関する多くのトラブルや困難に対しては、やはり障がい理解のあるコミュニティの協力や創出が不可欠である。ASD児もまじえて地域で育っていくような公園コミュニティをいかに創出していくかが今後重要になるだろう。最後に、少数ながら各項目においてそれぞれ保護者の方々が代替的にとられる行動や、その時に抱かれる感情についても記述が確認でき

表-3 障がいのある子どもやその家族が抱える公園でのトラブルや困難の内容

I 安全面でのトラブル・困難	II 対人面でのトラブル・困難	III 障がい理解に関するトラブル・困難
① “走る”行動に関する特性	① 順番が守れない/守りすぎる	周囲の視線が気になる場面
園外へ出て行く/飛び出す※	10 順番が守れない/待てない※	47 大声を出す、跳ねる等、変わった行動をとった時※
走り回る/突然走り出す	9 次の順番の人に交代できない	7 周囲の視線が気になる※
親が追いつけない/疲れる	7 順番を待てず他児を押す※	4 他の親から心無い言葉をかけられた/ 態度を変えられたことがあった時※
親が見失う※	5 順番を守りすぎる	1
他児に衝突する※	2 ② 遊具・玩具を介した他児とのやり取りの困難さ	障がい特性の説明が難しい時
② “走る”以外の行動に関する特性	他児の玩具を取る※	34
特性上、危険に気付けない※	5 他児とのやり取り/交流が苦手※	25 ◆保護者の方々の対応や抱く感情
危険な遊び方をする	3 遊具・玩具を共有/貸借できない※	10 代替的な対応
高い所に登る	3 ルールが守れない※	6 人がいない時間に公園に行く※
落ちている物を口にする	2 滑り台を逆走る/玩具を転がす	3 人がいないトンネルで走らせる
高い所から落ちる	1 他児の作った物を壊す	2 抱く感情
川に落ちる	③ 他者との距離感	公園で遊ぶのを我慢する
立入禁止に侵入する	1 他人との距離が分からず近すぎる※	11 公園に連れて行きたくない※
③ 危険を感じる公園環境	他児が苦手で空くまで遊べない※	5 親同士の関わりを避けたい※
柵があいまい/柵がない※	3 他人に話しかけすぎ	5 IV 帰宅時におけるトラブル・困難
公園が広い	2 他人について行く/追いかける	3 ① 遊びを終わらせる難しさ
公園が混雑している	2 他人に抱きつく/体を触る	2 遊びを終われず、帰れない※
公園利用児の体格差/力の加減の違い※	③ その他の対人トラブル	帰ろうとすると泣く/暴れる/癇癪/パニックを起こす
危険がある(詳細不明)	1 思いを伝えられず手が出てしまう※	13 ② 終わりがつかない公園環境
◆保護者の方々の対応や抱く感情	他人の靴/物/食べ物等に勝手に触る・取る	3 遊具は片づけられないため帰れない
代替的な対応	大人とのトラブル(詳細不明)	2 V その他のトラブル・困難
人がいない時間/公園を探す	④ 対人面に関わる公園環境	① 公園の施設の不足
広い公園を探す	2 遊具が難しすぎる/遊び方がわからない※	1 トイレがない、砂場がない
親がずっと一緒にいる	◆保護者の方々の対応や抱く感情	障がいを理由に遊具利用を断られた
広い場所で走らせる	1 代替的な対応	② 子どものこだわり
親がおんぶ/だっこをする	1 人がいない公園を探す※	公園通い(2)水遊び(2)衣服(1)
弟妹とは別々に連れて行く	1 その場を離れる	2 自販機(1)虫さされ(1)
抱く感情	2 広い公園を探す	1 ◆保護者の方々の対応や抱く感情
親だけの対応では安全の確保は難しい※	抱く感情	抱く感情
公園には連れて行けない	1 親が負い目辛さを感じる/謝る※	5 遊びが広がらない
	公園に連れて行きたくない※	1 初めての場所は不安で車から出られない

注) 数字は件数を示し、※は自治体職員も同様の回答を示したことを示す

◆自治体職員が聞いたトラブル・困難

- ・休憩施設:安全で清潔な休憩施設の不足、障がい者に付随する十分な荷物を置くスペースや見守りができる休憩施設が少ない
- ・トイレ:ニオイに敏感だったり、薄暗いところが苦手なのでトイレは明るく綺麗に保ってほしい。
- ・遊具:大きい遊具が怖い、障がい児が遊べる遊具が少ない、心を落ち着かせるスペースがない
- ・プール:プールを利用する時、スイミングキャップを被ることができず、プールの利用を断られた
- ・他児とのやり取り:自分の子が周囲に迷惑をかけないか心配、公園利用児の遊び方が激しい
- ・その他:障がいを持っていることを知らず、警察に通報された

だが、「人がいない時間/公園を探す」「公園には連れて行けない」「初めての場所は不安で車から出られない」など、トラブルや困難によって、ASD 児とその親の足が公園から遠のいていく様子もうかがえた。

一方、※が付いている項目は自治体アンケートでも自由記述でみられた項目であるが、70 項目のうち 27 項目と、多様なトラブルや困難さを把握するまでに至っていないことが明らかとなった。ただ「障がい者に付随する十分な荷物を置くスペースや見守りができる休憩施設が少ない」など、休憩施設やトイレ、遊具といった施設に対して改善を希望する声は、少数であるが行政に届けられている実態もうかがえた。

3-3. ASD 児やその保護者に対して有効と考えられる施策とそれに対する自治体の意向

表-4 に ASD 児やその保護者に対して有効と考えられる施策とそれに対する自治体の意向を示す。表-4 より「遊び場の周囲への柵や生垣の設置 (38.3%)」や「水や砂など、感覚遊びの提供 (33.2%)」は、3 割以上の自治体で取り組まれており、また困難とする回答も半数以下であることから、比較的取り組みやすい施策であると考えられる。また「遊び方を示したイラストの設置 (49.3%)」と「インクルーシブ遊具を複数ヶ所に設置 (49.0%)」も、現在はあまり取り組まれていないが、それぞれ半数近く自治体が「これから取り組みたい」としていることから、設置等が進むものと考えられる。

一方、木登りに関する項目と人材に関する項目はともに 8 割以上が取り組み困難とされた。前者は法的に難しい面があるが、後者は障がい理解のある公園コミュニティ創出の観点からも重要な取り組みと考えられ、管理者と協議するなど対応を期待したい。

表-4 ASD 児やその保護者に対して有効と考えられる施策とそれに対する自治体の意向

	遊び場の周囲への柵や生垣の設置	木登りが可能な樹木の設置	落下防止用ネット等の設置	順番待ちを示す足跡やラインの設置	遊び方を示したイラストの設置	全体を見渡せる場所等、慣れる場の設置	インクルーシブ遊具を複数ヶ所に設置	ASD理解のため看板設置やイベントの実施	水や砂など、感覚遊びの提供	行き先に困らない動線の提供	障がい理解のあるボランティア団体の立ち上げ	専門職人の配置
すでに取り組んでいる	38.3	2.5	0.1	1.6	10.8	16.3	6.9	0.6	33.2	2.2	1.3	0.6
まだだが、これからしたい	20.6	15.3	16.9	39.2	49.3	33.3	49.0	31.6	31.6	38.7	10.2	7.6
取り組みは困難	41.3	82.3	83.1	59.3	40.1	50.5	44.2	67.9	35.4	59.2	88.6	91.9

※単位は%

3-4. プレーパークについて

図-3 にプレーパークの運営実態を、図-4 にプレーパークの魅力に対する自治体の意識を示す。障がい理解のあるコミュニティ創出の 1 つのあり方として、最後にプレーパークの展開可能性について考察する。

まず今回のアンケートを通じて、78 の自治体 (9.4%) ですでにプレーパークが行われていることが明らかとなった。表-4 で「障害理解のあるボランティア団体の立ち上げ」について、すでに取り組んでいるとする自治体が 1.3% しかなかったことから、プレーパークが障がい理解のあるボランティアとして認識されていないことがうかがえる。また運営では、ボランティアによるもの、そして常設でないイベント型のプレーパークが多いこともあり、さらには公園管理者が業務の 1 つとして行っている地域も 8.4% あることから、取り組みとしてはさほどハードルの高い事業ではない。

図-4 より自治体職員の意識を捉えると、「火を使ったり木登りしたりと普段できない体験ができる (45.3%)」「手づくりで遊具が作られていて、子どもたちの思いや成長に応じて作り変えられる (38.1%)」「時間が決められておらず、飽きるまで遊びきることができる (27.6%)」といった管理に関わる特徴に対しては、相対的に評価が低かったものの、それでも 1/4~1/3 の自治体は評価をしていることから、比較的受け入れられやすい取り組みであるといえるだろう。

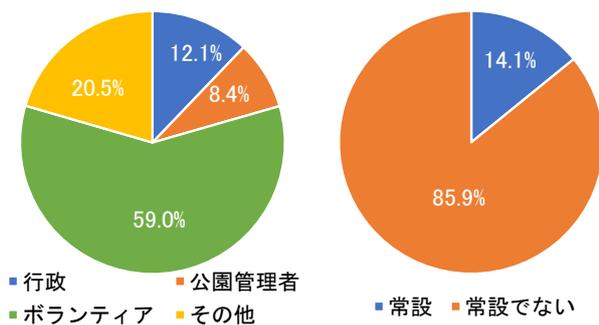


図-3 プレーパークの運営実態

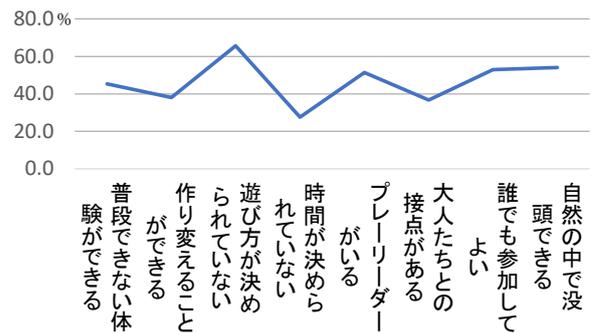


図-4 プレーパークの特徴に対する自治体の意識

4 結果および考察2

4-1. インクルーシブ・プレーパークの実施と検証（赤穂海浜公園）

プレーパークがインクルーシブな遊び場として妥当か評価を得るべく、10月14日に近隣の定時制高校の高校生および福祉系の大学生と、各学校の教員を中心にプレーパークを実践、参加した高校教員や大学教員、まちづくりコンサルタント、合わせて5名からコメントを得ることとした。取り組み内容は前述のとおりで、朽ち木の中の虫探し、ロープ遊具、昆虫採集、焚火などである。

1) 子どもたちの特性に合わせて遊び場が変化すること

福祉系の大学で教鞭をとる教員から「普通の公園の遊具では、遊具が子ども選別していて、子どもたちが遊具に合わせて遊んでいるけれども、ここでは逆で、プレーリーダーの助けにより、遊具の方が子供に合わせていますね」とのコメントを得た。写真-1はロープ渡りを行っている様子だが、大学生が子どもたちの体の大きさに応じてロープを上下させている様子が見える。プレーパークは手づくりの遊び場なので、子どもたちの特性、興味、身体的成長に合わせて環境を変えることができ、インクルーシブな遊び場として有用な点であるといえるだろう。



写真-1 子どもたちの体の大きさに応じてロープを上下させている

2) 厳密にスケジュールや役割が決めていないこと

事前説明にて、高校教員から「当日に手順を急に変えたら混乱する生徒がいるかも知れません」との指摘を受けたが、実際プレーパークが行われると「相当臨機応変に活躍していたと思いました。特に焼き芋を焼いていた彼女は、子どもたちに焼き芋を配りながら声をかけたり、後半は他のプログラムに参加したりするなど、随分のびのびと過ごしていました」と、コメントに変化がみられた。また「話かけることが苦手な生徒も、徐々に地域の方へ、自分から話題を振る姿が見られました」ともコメントされた。さらに、運営に協力しているまちづくりコンサルタントの方から「今日のプログラムは厳密にスケジュールや役割が決めていたわけでもありませんでした。その意味で生徒さんたちは自分に課せられたノルマに縛られることなく自分のペースで参加できたのでは？と思いました。そしてそれはインクルーシブではとても大切なことだと思いました」とのコメントも得た。以上のように、厳密にスケジュールや役割が決めていなかったことで、他者や活動に関わるタイミングを自分で決めることができ、そのことが主体的な行動につながったものと考えられる。



写真-2 プレーパークでは色んなところで思い思いの遊びが行われる

3) 異年齢の子どもたちや、色んな立場の大人たちが参加しているので、多様な人間関係が生まれる（子どもの世界も広がる）

高校教員から「校内ではまだ少し教員に頼ることがある生徒も、小さなお子さんと一緒に遊ぶことで、いつもとは逆に援助する立場になって考えるようになっていたと思います」
「教育系の進路を希望する生徒にとって、関西福祉大の学生さんとお話する機会が得られたことは、モチベーションを高めたり、自分の将来像をよく考えたりすることにつながったと思います」とのコメントを得た。また、まちづくりコンサルタントの方からは「ロープ渡りや朽木のほじくりなどでは、自分の子どもだけではなく、近くにいる他所の子どもさんにも注意してあげるなど、親御さん全体で子どもの安全を見守っている様子が見受けられました。これは、安全が保障された一般の遊具広場では中々出会えない光景だと思いました」とのコメントがあった。このようにプレーパークには、異年齢の子どもたちや、色んな立場の大人たちが参加しているので、多様な人間関係が生まれることがわかる。またインクルー

シブに関連する施策として、支援される側の取り組みを考えがちであるが、支援する側に特性を持った子どもたちを位置づけ、何らかの役割を持った方が関わりやすいのではないかと、そういう場としてプレーパークは役割も多様に存在するので、適しているのではないかと推察される。



写真-3 多様な“支援する-支援される”の関係

4-2. インクルーシブ・プレーパークの実施と検証（明石公園）

図-5 に一般来園者と支援センターに通う家族（ASD 児の家族）の来訪頻度を、図-6 に普段の遊び場を示す。まず図-5 より来訪頻度をみてみると、一般来園者は「週 1、2 回」が 13.6%、支援センターに通う家族は「年数回」が 17.4%と、来訪頻度は一般来園者の方が多い。

また、図-6 より普段の遊び場をみてみると、共通して「家の中」「小さな公園」「遊具のある場所」が半数以上と、多く訪れていることがわかった。一方「安全な場所」は、支援センターに通う家族の方が 39.1%、一般来園者が 13.6%と、支援センターの方が多かった。これは表-3 のとおり、ASD 児の特性と大いに関係があるということがうかがえる。

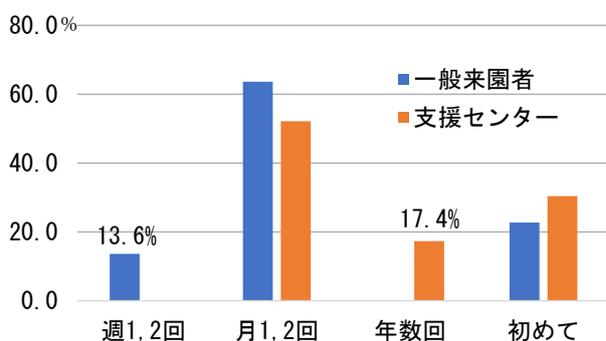


図-5 来訪頻度

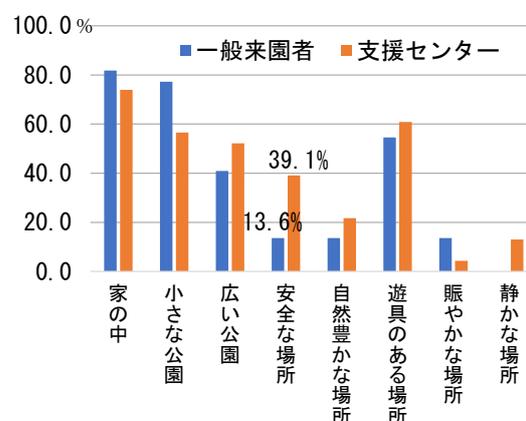


図-6 普段の遊び場（複数回答）

図-7 に子どもが好きな場所や素材を、図-8 にプレーパークに期待する事業を示す。図-7 より、10%以上の差がある項目をみてみると、「水辺（一般来園者：31.8%、支援センター：47.8%）」「起伏（22.7%、34.8%）」「草地・花壇（4.5%、30.4%）」の3項目について、ASD児の方が高かった。また図-8 よりプレーパークに期待する事業をみてみると「水の体験（40.9%、69.6%）」はASD児の方が高かった。これは、水の感触や水光の美しさ、何かを投げ込んだ時の音など多様な感覚刺激が得られることが要因と考えられる。一方、「火の体験（40.9%、8.7%）」や「昆虫採集（27.3%、13.0%）」は、ASD児は低く、安全上の課題や虫をつぶしてしまうといった課題があるかと考えられる。その他、起伏のある地形は重心を楽しむ機会となること、草地や花壇は花びらを数えたり葉を触ったり、可能であればちぎったり、あるいは土を触ったりといった多様な体験が得られることが要因として考えられる。また図-8 より親子の交流、他児との交流、A園が対象の交流など、支援センターに通う家族の方がより交流を望んでいることも明らかとなった。

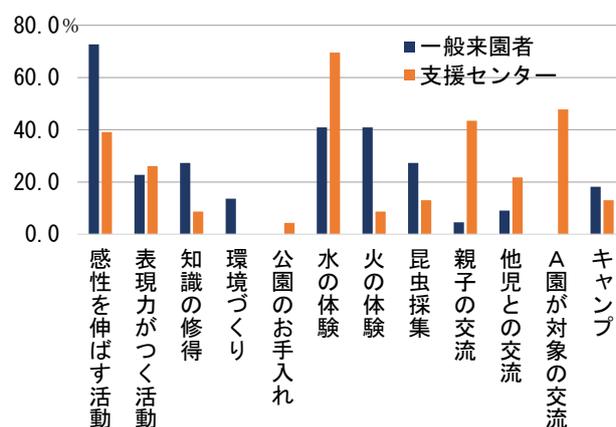
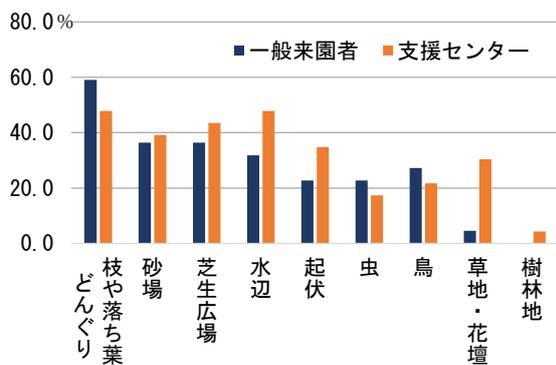


図-7 子どもが好きな場所や素材（複数回答） 図-8 プレーパークに期待する事業（複数回答）

5. 次年度に向けて

次年度に向けた取り組みとして、以下の3点を行う。

- 1) インクルーシブ・プレーパークのコンテンツの充実化
 - 水の体験、ちぎって良い花壇など、ASD児のための体験をより深める
 - 秘密基地づくりなど、より創造力が発揮できる体験をより深める
 - 活動だけでなく環境整備のあり方（例えば起伏のある地形やちぎって良い花壇など）についても試行し、効果検証を行う。
- 2) 人材育成
 - ステークホルダとともに学びのプログラムを開発する
 - 高校や大学でのカリキュラムに反映可能か検討する
- 3) モデルプログラムを策定